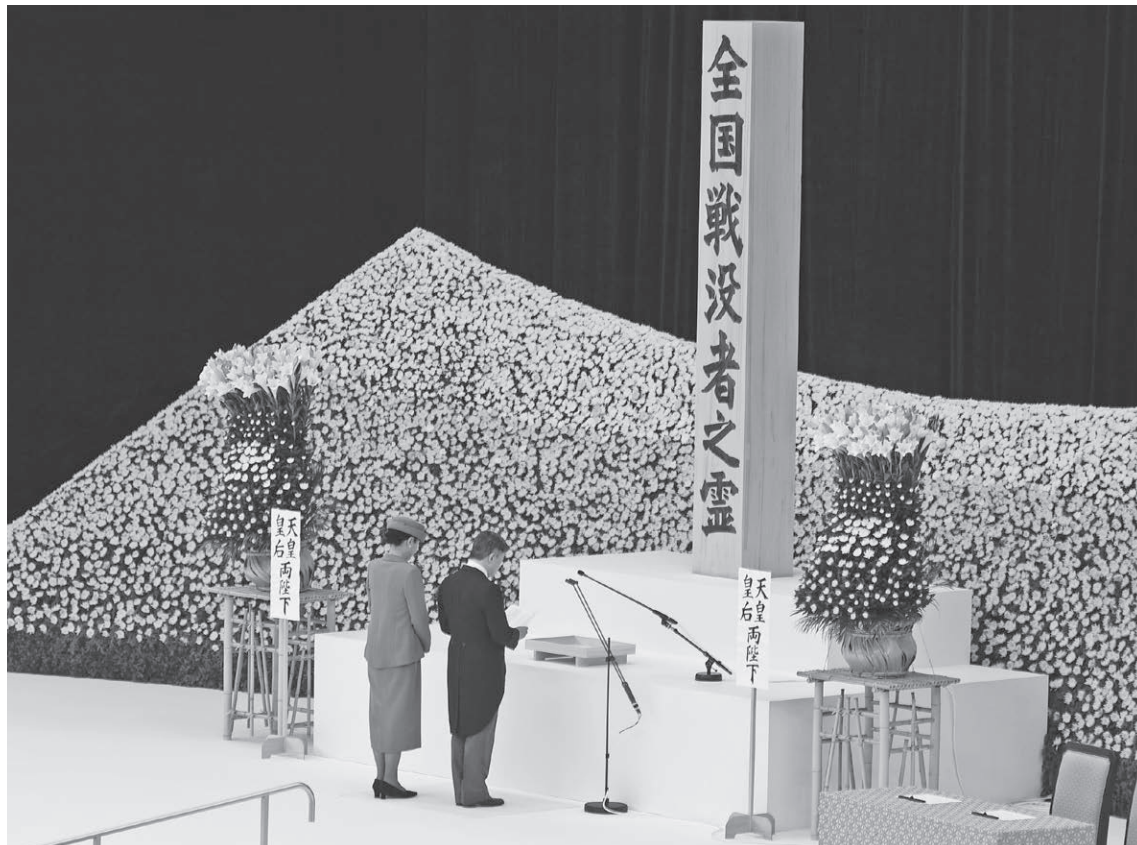


令和8年 全国戦没者追悼式



一般財団法人
徳島県遺族会

会報

発行所
徳島市雑賀町 東開21番地 1
一般財団法人
徳島県遺族会
TEL (088) 636-3212
FAX (088) 636-3213
<http://izokukai.jp/>
発行責任者
坂千代 克彦
印刷
グランド印刷㈱

天皇陛下おことば

令和八年八月十五日(土)
日本武道館
全国戦没者追悼式

本日、「戦没者を追悼し平和を祈念する日」に当たり、全国戦没者追悼式に臨み、さきの大戦においてかけがえのない命を失った数多くの人々とその遺族を思い、深い悲しみを新たにいたします。

終戦以来八十二年、人々のたゆまない努力により、今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられました。多くの苦難に満ちた国民の歩みを思うとき、誠に感慨深いものがあります。戦中・戦後の苦難を今後とも語り継ぎ、私たち皆で心を合わせ、将来にわたって平和と人々の幸せを希求し続けていくことを心から願います。

ここに、戦後の長きにわたる平和な歲月に思いを致しつつ、過去を顧み、深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願ひ、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に對し、全国民と共に、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります。

八十二回目の終戦記念日を迎えた八月十五日、政府主催の全国戦没者追悼式が東京都千代田区の日本武道館で斎行された。追悼式には天皇、皇后両陛下をはじめ、高市早苗内閣総理大臣、衆参両院議長、最高裁長官などの各界代表、全国の戦没者遺族、約四千三百人が参列した。高市総理の式辞の後、正午の時報とともに参列者全員で黙祷を捧げた。

天皇陛下のお言葉を賜ったのち、衆参議長、最高裁長官、遺族代表として金森武士さん（岐阜県遺族会副会長）が追悼の辞を述べた。

最後に参列者が式壇に献花を行い、本県代表としては、徳島県遺族会の坂千代克彦会長が献花を行った。

語り部事業のご案内（奇数月に開催）

●第108回 11月14日(土) 13:30～14:30 戦没者記念館

「父と母 そして私」 戸井田 龍行 氏（徳島市）

戸井田様のお父様は、昭和19年8月13日に徴用船第二朝日丸で南シナ海を香港に向け航行中、航空機の攻撃により船が沈没し散華されました。今回は、亡き父と母の馴れ初めをはじめ、戦後一人で二人の子供を育てた母の苦労や感謝の気持ちなどをお話いただきます。

●第109回 令和9年1月9日(土) 13:30～14:30 戦没者記念館

「終戦16日前 南九州で戦死した祖父 享年38歳」 池本 一彦 氏（徳島市）

池本様の祖父池本三郎様は、1945年（昭和20年）7月29日にアメリカ軍の九州侵攻作戦に備えた作戦中、敵機の爆撃で戦死されました。散華された日は、8月15日終戦の16日前で享年38歳でした。今回は、「祖父の旧海軍の履歴や所属部隊・基地、戦死について」や「残された家族の戦後」、「日本遺族会と県遺族会、県遺族会青年部の活動」、「英霊からのバトン」などについて語っていただきます。

●第110回 3月13日(土) 13:30～14:30 戦没者記念館

「80年前の悲惨な出来事から何を学び、どう継承していくべきか」 山本 健司 氏（阿南市）

現在、山本様は徳島県遺族会の副会長兼青年部長に就任いただいております。今回は、「当時の時代背景や戦後の経済成長と国民の意識」、戦争の記憶の風化が懸念される中、「戦後100年に向けどのように語り継いでいくべきか」などについて語っていただきます。

全国戦没者追悼式 遺族代表 追悼の辞

令和八年八月十五日(土)
日本武道館
全国戦没者追悼式

本日ここに、天皇后陛下のご臨席を仰ぎ、各界代表をはじめ、全国各地から遺族の代表が集い、全国戦没者追悼式が厳粛に執り行われるに当たり、戦没者遺族を代表し、謹んで追悼の言葉を申し上げます。

先の大戦が終わりを告げてから早くも八十一年を迎えました。

昭和十七年二月、生まれて一週間目の私を残し、父は出征され二十年五月三十二歳で、フィリピンルソン島で戦死されました。

私も三十二歳の時に父の事が知りたくて、遺骨収集派遣団に参加致しました。当時は数多くの御遺骨が収集できましたが、しかし、今も海外では戦没された、御遺骨の半数以上が眠っておられ、一日も早くのご帰国を願うばかりです。

我が町は、二十年七月の二回目の空襲の際、原爆投下訓練として、長崎県に落とされた原爆と同型の一トン爆弾が落とされました。四回目の空襲では、母親に布団をかぶり、おんぶされ郊外に逃げ、布団の間から空が花火のように見えた記憶が鮮明に思い出されます。市内中心部がほとんど焼失し、翌朝帰って来た時には、我が家もその空襲で全焼しており、その後の祖母や母の苦労は大変

だったと思います。家庭を守り私を何不自由なく育ててくれた、祖母や母には感謝しかありません。

平和が長く続き、戦争は過去のことと忘れつつある今日、未だ世界各地では多くの紛争が続いており、私達のような犠牲者が後を絶ちません。一日でも早く世界の平和が訪れることを願うばかりです。

私達遺族は、戦争の悲惨さや残された家族の苦労を、身をもって知っております。

また今日の平和が、国の礎となられた、ご英霊皆様の尊い犠牲のもとにあることを忘れてはなりません。この事を次の世代へと語り継ぐことこそが我々に課せられた使命です。

本日は、多くのご来賓の参列のもと、このように厳かに追悼式を挙行していただき、遺族を代表し心から感謝申し上げます。

結びに、ご英霊のご冥福と、ご参列の皆様のご多幸を祈念申し上げ、追悼の言葉といたします。

令和八年八月十五日

全国戦没者遺族代表

金森 武士

徳島県護国神社例大祭のご案内

護国神社では、下記日程により恒例の例大祭を斎行いたします。

この祭典は、県内各地からご遺族やご来賓の方々のご参列をいただき、わが国の平和の礎となられたご英霊に対して、感謝と慰霊の誠を捧げる大切なお祭りです。

当日はお誘い合わせの上、是非ご参拝いただきますようご案内申し上げます。

尚、詳細の案内状や玉串料奉納帳などは、各市町村遺族会にご送付させていただきますので、宜しくお願いたします。

— 記 —

● 日時

令和八年十一月二日(月)
午前十時三十分から正午過ぎまで

※一般参列者用の駐車場は、台数に限りがございますので、なるべく乗り合わせていただくか他の交通機関にてご参拝ください。

● お問い合わせ

徳島県護国神社社務所

電話 088(669)3090



〽令和九年度政府予算獲得に向けて〽 全国戦没者遺族代表者会議の開催

令和八年六月三十日（火）自由民主党ホール（東京都）において、全国の遺族代表者二百三十五名が参集し、全国戦没者遺族代表者会議が開催され、本会からは坂千代会長、武田副会長、高井青年部副部長が参加しました。

また、来賓として小林自民党政調会長、有村自民党総務会長、上野厚生労働大臣、松本文部科学大臣をはじめ、多数の自民党国会議員に御臨席いただきました。

大会では、令和九年度政府予算に対する最重要要望項目として、「特別弔慰金支給法の改善」「平和の語り部事業拡充強化」等を期することが決議されました。

また、大会の前後に本会役員は、自民党総務会長室で有村総務会長、衆参議員会館で県選出国会議員を訪ね、令和九年度の政府予算獲得に向けて要望活動を行いました。今後必要事項の実現に向け、全国の遺族会と連携しながら運動を継続して参ります。

〽日本遺族会主催〽 昭和百年記念 「平和の語り部大会」 「女性部研修会」の開催

令和八年六月二十九日（月）自由民主党ホール（東京都）において、日本遺族会主催の昭和百年記念「平和の語り部大会」が開催され、本会からは坂千代会長、演副会長、武田副会長、高井青年部副部長が参加しました。

大会は、日本遺族会・甘竹常務理事（元大船渡市長）による学校講話の実演、兵庫県遺族会・荒堀青年部長による次世代の語り部実演、動画視聴と続き、終了後に場所を九段会館に移動し、大会参加者・自民党国

会議員の参加による懇親会があり、各支部の皆様と交流を深めました。

また、翌六月三十日（火）〽七月一日（水）の日程で、九段会館において女性部研修会が開催され、本会からは演副会長兼女性部長、仁木那賀町女性部副部長が参加しました。

研修会では、「平和の語り部事業」において、ニーズが増えている学校での講話について、「動画の制作」「動画を学校講話でどのように活かすべきか」などについて、講話や座談会を実施しました。



「令和8年度 徳島県戦没者遺族大会」の開催



去る九月十二日(土)、徳島グランヴィリオホテルにおいて、「令和八年度徳島県戦没者遺族大会」が開催された。

大会には後藤田正純徳島県知事(名誉大会長)、水落敏栄日本遺族会会長、山口俊一衆議院議員、仁木博文衆議院議員、中西祐介参議院議員、井川龍二徳島県議会議長、眞貝浩司自民党徳島県連選挙対策委員長をはじめ、市町村長、各種関係団体の代表などのご来賓、各地区のご遺族、約三百名が出席された。

大会では、遺族会への多大な貢献と功労のあった方々として、五名の会員に名誉大会長表彰(知事表彰)、二十六名の会員に会長表彰が贈られた。

また、中学生による第十二回平和作文コンクール(徳島県と本会の共催)の優秀作品を表彰するとともに、最優秀賞の受賞者による作文の朗読が行われた。

本大会において、実現を期するものとして決議された事項は、次のとおりである。

大会決議

本日ここに令和八年度徳島県戦没者遺族大会を開催し、総力を挙げて次の各項の実現を期する。

- 一、総理、閣僚及び国会議員等の靖国神社参拝の定着をはかること。
 - 一、戦没者遺族に対する処遇は、国家補償の理念に基づき改善すること。
 - 一、戦争の記憶を伝承する「平和の語り部」事業の拡充強化をはかること。
 - 一、国内戦没者慰霊碑の永続的な維持管理等について公的支援を行うこと。
 - 一、戦没者の遺骨収集事業の拡充強化をはかること。
 - 一、組織の強化・存続を図るため、青年部の育成を積極的に推進すること。
- 以上、決議する。

令和八年九月十二日

令和八年度徳島県戦没者遺族大会

会 長 表 彰																										名誉大会長表彰				
三好郡	三好郡	美馬郡	板野郡	板野郡	海部郡	海部郡	那賀郡	那賀郡	名西郡	名西郡	勝浦郡	三好市	三好市	美馬市	美馬市	阿波市	阿波市	吉野川市	吉野川市	阿南市	小松島市	鳴門市	鳴門市	徳島市	徳島市	板野郡	板野郡	那賀郡	名西郡	阿南市
吉田憲雄	吉井武	高木一永	北池清志	元木敏坦	實川敏宏	油津彬	平井式郎	登敏高	栗飯原明生	富杉恵美子	小山浩	西岡治男	小倉美智子	元山勝市	経塚和義	笠井旦美	吉岡実	板東恵美子	大谷純治	江本加代子	佐藤茂樹	大森豊彦	岡本彰	横石忠男	平岡節子	吉田隆之	本間伸一	延敬子	仁木孝	神野武重

第12回「平和作文コンクール」

最優秀賞	吉野川市立鴨島第一中学校	二年	坂本航士朗さん
優 秀 賞	徳島市城西中学校	三年	長井ひなのさん
	海陽町立海陽中学校	二年	小西愛さん

僕は戦争は自分とは関係ないと思っていました。なぜなら僕は今、学校に行って勉強したり、友達と遊んだり、食事や睡眠をとることができて、ミサイルなどの核兵器がとんでこない当たり前の平和な生活を送ることができているし、戦争については本や資料で知ることができたけれど、戦争中の人々の暮らしがもし自分だったらと考えることができなかったからです。しかし、昨年行った家族旅行や今年行った修学旅行で自分の考えが変わりました。

昨年、僕は家族旅行で広島を訪れました。広島平和記念資料館や原爆ドームを見学し、戦争の恐ろしさについて学びました。資料館には、原爆によって壊された建物や、当時の人々が使っていた遺品、被爆者の体験を伝える展示が数多くありました。また、映像では原爆投下直後の広島の様子が映し



最優秀賞
「広島と沖縄で学んだこと」
吉野川市立鴨島第一中学校
二年 坂本 航士朗さん

出されていました。その光景は、思わず目を背けたくなるほど悲惨なものでした。焼け野原となった街、人々の苦しむ姿を見たとき、僕は言葉を失い、その場から動けなくなりました。さらに印象に残ったのは、多くの外国人が資料館を訪れていたことです。日本だけでなく世界中の人々が広島を訪れ、戦争の歴史や平和の大切さについて学んでいることを知りました。戦争の悲劇を繰り返してはいけないという思いは、国や文化の違いを超えて共通する願いなのだと感じました。

そして最近、僕は修学旅行で沖縄を訪れました。沖縄では、地上戦で使われた糸数アブチラガマやひめゆり平和祈念資料館、沖縄県平和祈念公園に行きました。ガマの中はとても暗く当時の人々がここで生活していたと考えると、想像がつきませんでした。また、ひめゆり平和資料館では今の自分と同じ年齢の人が戦争を体験して知った、戦争の恐ろしさ、命の尊さ、平和の大切さを改めて感じることができました。沖縄県平和祈念公園では、「平和の礎」などから、戦争は二度と起こさないという強い気持ちが伝わってきました。

人権とは、一人ひとりが人間らしく生きるために保障される大切な権利です。しかし戦争は、その人権を一瞬で奪ってしまいます。僕は広島と沖縄での学習を通して、平和であることがたり前ではなく、多くの人々の犠牲の上に成り立っていることを知りました。

これから僕は戦争の歴史を正しく学び、その記憶を次の世代へ伝えていかなければならないと思います。また、相手の考えや立場を尊重し、差別やいじめを許さない行動を心掛けたいです。人権を守ることは特別なことではなく、一人ひとりを大切にすることから始まるのだと思います。

広島や沖縄を見て、聞いて、感じたことを忘れず、平和な社会を守るために自分にできることを考え続けたいです。そして誰もが安心して暮らし、人権が尊重される未来をつくる一員になりたいと思います。

優秀賞

「平和への第一歩」

徳島市城西中学校

三年 長井 ひなのさん



先日、私はイランとイスラエル・アメリカのイスラエル紛争に関するニュースを見ました。ホルムズ海峡を封鎖し、石油や天然ガスの供給停止や世界のエネルギー価格が上昇するなど、日本にも大きな影響を及ぼしています。今現在、日本は戦争をしてはいないものの、歴史上数多くの戦争や紛争をしていました。

私の曾祖父は、太平洋戦争に海軍の船の整備士として、参戦していたそうです。曾祖父が戦った地は、太平洋戦争の激戦地でした。日本軍兵士は約三十五万人もの人が命を落とすことになりました。曾祖父はある日、日本軍艦三隻で戦地に向かっていました。曾祖父が乗った船は一番後ろでした。向かっている途中、前の船が攻撃を受け、一瞬で海へと沈みました。魚雷による攻撃でした。その時曾祖父は、「死ぬ覚悟」をしていたそうです。しかし、奇跡的に曾祖父の船だけが攻撃

を受けませんでした。曾祖父は、生前このようなことを言っていました。「目の前で仲間が死んでいくのを見るのが苦しくて、悲しかった。これは、死ぬまで忘れることができない出来事だ。」曾祖父は、何月何日、どこで、何をしたなど何十年も前のこの出来事を鮮明に覚えていました。戦争は、戦争が終わっても心に深く傷を負い続けるものだ」と改めて感じました。

戦争を世界から少しでもなくすために私に何かできることはないか、考えてみました。まずは、「戦争について知ること」だと思います。戦争についての正しい知識を持つておくことで、いざという時にただししい行動をとることが出来ます。戦争や紛争がなぜ起こるのか、どのような影響を与えるのかを理解することも私ができる平和への第一歩だと思います。また、日常生活の中でも平和につながるがあると思います。それは「話し合い」です。戦争や紛争でも、自分の一方的な考えで、相手の考えを尊重せず大きな問題に発展することがあります。だから、日常でも相手のことを思いやり、落ち着いて接することが大切だと思います。

戦争は、人も生活も何もかもを一瞬で変えてしまいます。過去に起こった戦争や紛争、また犠牲者を無駄にしないように、戦争の悲惨さを永遠に伝えていくべきです。戦争を体験したことがない私たちも戦争についての関心や知識を持ち続けることが大切だと考えます。

優秀賞

「私が見つけた本当の『幸せ』」

海陽町立海陽中学校

二年 小西 愛さん



「幸せってなんだろう。」

私は悩まされた。私は今まで幸せについて深く考えたことがなかった。しかし、五月に修学旅行で沖縄を訪れ、平和学習をしたことが、考えるきっかけになった。

沖縄では、ひめゆりの塔や平和祈念資料館、平和祈念公園などを見学した。戦争によって多くの人が苦しみ、命を落としたことが分かる写真や、被爆した人の話をテレビで聞いて、大きな衝撃を受けた。しかし、私にはもっと衝撃を受けた場所がある。それは、ガマだ。入り口が思っていたより狭く、奥に進んでいくにつれて暗くなり、懐中電灯で足下を照らすのが精一杯だった。ガイドさんが、「三秒だけ、明かりを消してみてください。」と言った。消してみると思っていたより暗く、いつもの三秒より長く感じた。その三秒間が私にとっては一番衝撃的で心に残ったのだ。

私たちは毎日のように学校に通い、友達と話し、笑い合っている。当然のように家族と過ごすことができる。私は実際に沖縄の地を訪れたことで、今の生活がどれだけ恵まれているかを改めて実感することができた。

戦争は人々の命だけでなく、人権まで奪ってしまう。安心して暮らす権利や学ぶ権利、自分らしく生きる権利などが失われてしまう。誰もがかけがえないひとりの人間であり、一つの命として大切にされなければならぬ。しかし、戦争はすべてを壊してしまう。沖縄戦を経験した人の中には、「まだ、戦争は終わっていない。」と言う人もいます。そのことを常に考えながら、次の世代にも伝えていきたい。

修学旅行から帰ってきた後も、平和とは何かについて考えた。今の当たり前は、当たり前ではないことに気づいた。沖縄で学んできたことから、一人ひとりの人権を大切にし、相手を思いやる気持ちを忘れずに生活していきたい。そして、戦争の悲惨さや平和の大切さをもっと学び、自分にできることを考え続けたい。誰もが安心して暮らすために、一人ひとりが平和と言うものをもう一度考え直す必要がある。

最後に私が思う「幸せ」は、当たり前ではないこの日常、当たり前だと思えることだ。今回の修学旅行で見て、聞いて、感じたことをこれからの人生に活かしていきたい。

第二十回特別企画展

「沖縄戦の記録（記憶）」を開催

昭和二十年三月二十六日～六月二十三日の約三ヶ月間、日本で唯一の地上戦となった沖縄戦では、多くの一般人を含む約二十万人の方々が亡くなりました。

終戦から八十一年が経過した今でも、沖縄には当時の戦いの記憶（戦跡）が数多く残っています。

今回の特別企画展は、沖縄戦

の記録を写真や資料などで紹介することにより、改めて「戦争の悲惨さ」、「平和の尊さ・命の大切さ」を考える機会としていただくため開催しました。

開催期間は、学校の夏休み期間と重なる令和八年八月一日（土）から八月十六日（日）で、小中高生をはじめとする若い世代を中心に、約千百人

の皆様に来館いただきました。

今回の特別展の開催にあたっては、沖縄平和祈念資料館様の御協力により、貴重な写真や資料を展示することができました。

関係者の皆様には、深く感謝申し上げる次第であります。



戦没者記念館だより — 写真展示数 8,224柱（R8.9.20 現在） —

▶ 来館者のお声

- ・沖縄戦の記録（記憶）が偶然開催されていて、心が痛みました。戦争で戦ってくださった方や沖縄の方々に心から「もう戦争はしてはいけない」と伝えていただいているように思いました。（兵庫県：20代・女性）
- ・私は社会の作文のために見に来ました。すごくつらい気持ちになりました。ひいおじいちゃんもいました。沢山の人が亡くなってすごく悲しいです。これからはこのようなことが二度とないよう願います。（県内：10代・女性）
- ・初めて来館しました。実家に祖父の遺影がありますが、徳島県内の大勢の方たちの遺影を目の当たりにし、驚くと同時にその方たちのそれぞれの家族や周りの方たちの悲しみを思うといたたまれない気持ちになりました。記念館があるのをいろいろな人に知ってもらいたいと思いました。次は子供と来館したいです。（茨城県：50代・女性）
- ・子どもの自由研究のために来させていただきましたが親の方が勉強になりました。（県内：30代・男性）
- ・小学校の時より大人になってから見るととても感じるのがありました。写真も展示もきれいに管理していた。映像もありより深く知れた。（県内：20代・女性）
- ・戦争を決して美化せず、真に公平、中立に語っているのが好感をもてた。多くの人に来て欲しい。（埼玉県：50代・男性）

語り部事業講演要旨

●第106回語り部事業 7月11日(土)

「お父さん マサエです」

徳島市 仁志マサエ氏(81)



この写真が、私の父ですが、出征する時に置いて行ってくれました。

写真の裏には「お別れのお父さんです」と書いてありました。

父は、私が生まれた9日後に戦死したので、父の顔も、声も姿も温もりも、何も私は知りません。母や姉から話を聞き、写真や遺品を通して父の存在を想像するしかありませんでした。

父が出征した時に残された家族は、病弱の祖母と27歳の母、3歳半の姉、私は母のお腹の中で、4ヶ月でした。その日が父と家族の永遠の別れになってしまいました。

その日、姉は綺麗な着物を着せてもらい、親戚や近所の人が大勢来てくれて、はしゃいでいたそうですが、「おばさんに連れられて、父には会わせてくれなかった」と言っていました。

母の話では、「お父さんは辛くて、姉の顔を見ることすらできなかった」そうです。我が子を抱き締めることすらできず、父は断腸の思いで戦地へ赴いたのだと思います。家族と引き離される、その日の祖母を思うと、父を思うと、母を思うと、私は想像もつきません。

昭和19年は、戦局が日本本土の危機へと大きく悪化していた転換点で、兵力不足を補うため、働き盛りの男性、特に20代から30代に次々と召集令状が届いたようです。お国のために命を捧げることが美德とされ、出征兵士は日の丸の旗や万歳三唱で盛大に見送られたそうです。父もそうして出征したと母から聞きました。

これは、父から母に送られた最後の手紙の中に入っていた遺髪です。私が30歳ぐらいの頃から、いつも持ち歩いている宝物です。その手紙は、台湾の高雄市からで、産まれてくる私の名前について「男の子なら勝、女の子ならマサエと名付けてほしい」と書かれており、その中に「遺髪」と書いた封筒が入っていたそうです。

母は父の無事を願いながら、9月12日に私を出産しました。これは、昭和20年4月23日付けの戦死の通知です。父が戦死したのは、前年の9月21日、通知が届いたのは私が生後7ヶ月の時でした。

私が物心ついた時、父がいなくて貧しい暮らしだと分かりました。

母は、病弱な祖母の看病をしながら五反の田と畑を耕し、私たちを育ててくれました。

いつも一生懸命に寝る間を惜しんで、私たちを育てるために母は働いてくれました。

父の代わりもしてくれた母、強くて厳しく、愛情深く育ててくれた母でした。母から「お父さんは本当に優しい人だった」と何度も聞かされました。

4歳違いの姉は、いつも私を守ってくれましたが、一緒に遊んだ記憶がありません。おそらく、母の手伝いをしていたのだと思います。

姉は、父のこともよく話してくれました。「いつも優しいお父さんで怒ったことが無かった」、「仕事から帰ると姉を自転車に乗せ、日が暮れるまで遊んでくれた」父がいた日常は、家族が笑顔で幸せだったそうです。あの戦争がなければ、私もそんな平和で明るい家庭に生まれたはずでした。

平成28年にあった洋上慰霊での姉の追悼文には「いつか天国でお父さんに会えたら、マサエちゃんにも私にしてくれたように、たくさん遊んであげてとお願いするから。そして、

お父さんの肩も背中も手も足も、優しくさするからね」と書いてありました。

私の子どもの頃の写真は4枚だけで、乳児の時はありません。一家の大黒柱を失ったことで幸せな日常を壊されて、戦争遺児としての人生に変わってしまいました。

貧しい生活は、学ぶことより収入を得ることが優先でした。母の手伝いは、田植え、草取り、稲刈り、脱穀など、学校から帰るとすぐに田んぼや畑に行きました。休みの日は朝から作業を手伝いました。町内の家は電気が次々と点いていく中、いつまでもランプの灯でした。普通の靴を履いていた友が羨ましかった。私はゴム草履とゴム靴でした。

そんな中でも嬉しい思い出もありました。

小学校時代のクリスマスの日、担任の先生が私の寝ている間に穴の開いた靴下に桃色の筆箱を入れてくれました。子供心に一生忘れられないプレゼントで、大切に、大切に、長い間その筆箱を使いました。

中学2年生の授業では、先生から「明日、新聞を持ってくるように」と言われ、新聞を取っていないのでどうしようと思ったのですが、畳の下に敷いてあるのを思い出し、持っていました。

でも、私だけ茶色くなった新聞だったので慌てて隠しました。あの時の惨めな思い、忘れられません。気持ちが抑えられず、思い切って母に話したら、新聞の購読を申し込んでくれたのです。嬉しくて、毎日、新聞が届く前に起きて待っていました。

子供時代の私の唯一の楽しみは、母の手伝いでもらった小遣いで貸本屋に行くことでした。

ある日、フローレンス・ナイチンゲールの伝記を手に取り、夢中で何度も読みました。

クリミア戦争で戦場に身を置きながら、負傷した兵士のために献身的な看護のその姿に感銘を受け、人の命を救う仕事は父もきっと喜んでくれるはずだと、看護の道に進もうと思うようになりました。中学を卒業し、見習いをしながら学校で学ぶという大変な道のりではありましたが、遅く育ててくれた母のおかげで無事に看護師になることができました。学べない悔しさから、学べる喜びを知りました。看護師という職業が私は大好きです。父が導いてくれたのだと思います。

次に、何度か参加した父の慰霊の旅について、お話しします。

父の乗った淡路丸は、昭和19年9月18日、現地時間の午前6時30分に台湾の高雄港を出港し、後方支援業務に従事するため、フィリピン・ミンダナオ島のダバオに向かいました。

9月21日に淡路丸は、北ルソン島マイライ岬北方30kmの地点で敵の攻撃を受けて沈没し、678人中327人が戦死しました。出征から僅か6ヶ月後、ここで父は命を落としました。

1回目は、1995年(平成7年)にルソン島巡拝の旅に母・姉・私の3名が参加し、各地で4回の慰霊祭を行いました。父への追悼の言葉は、最後の手紙で名付けてくれた名前「お父さん、マサエです 私が見えますか」と天国の父に語りかけました。

2回目は、今から10年前に姉と参加した洋上慰霊です。全国から290名が参加し、徳島は4名が参加しました。ルソン島北方沖での慰霊祭は、雨天のため船内で行われ、私は追悼文を読ませていただきました。

3回目は、陸路でのフィリピン慰霊友好親善事業に私一人で参加しました。全国から86名が参加し、5回の慰霊祭が行われました。この旅では、母の着物姿を父に見せたいと思い、母の着物を姉が洋服にリメイクしてくれ、3着持参しました。

次に、昨年6月の洋上慰霊では、全国から200余名、徳島県は5名が参加しました。

今回が最後となる洋上慰霊の旅は、出発前に7つの思いと願いがありました。

一つ目は、前回の洋上慰霊が船内での慰霊祭だったので、今回は晴れて海を見ながら、海に眠る父に最後の別れをした。

二つ目は、父がお世話になった戦友の皆様にお礼を申し上げ、ご冥福を祈ること。

三つ目は、淡路丸の沈没地点に最接近した場所で、父に語りかけ追悼文を読むこと。

四つ目は、船内に父母の写真を並べ、好物を供えて11日間を一緒に過ごすこと。

五つ目は、お供え物を海に手向ける時は、前回できなかった。父と一緒に味わいたい。

六つ目は、参加できなかった姉のために、私の宝物である遺髪の一部を海に流すこと。海は繋がっているの、「徳島に流れてきて」と願いながら、今後は、姉と二人で徳島の海にいる父に会いに行く。

七つ目は、父が乗船していた淡路丸が沈没した地点の正確な深さを確認すること。聞いていたのは、5,000m～7,000mでしたが、正確には3,000mぐらいだと分かりました。

船室に父母の写真を並べ、父の好物と聞いていたビウをお供えしました。ちょうど美味しくなった頃でした。洋上慰霊の旅は、父母と毎日語り合った幸せな11日間でした。

6月5日、父の慰霊祭当日は想いが叶い、朝から太陽が海を照らしてくれ、午前10時30分から29名の合同慰霊祭が行われ、初めて海を見ながら父の慰霊をすることができました。

合同慰霊祭を終えた後、淡路丸の沈没地点に最接近した12時30分から、3階デッキで「お父さん、マサエです。私が見えますか」と、父への思いを綴った追悼文を読み、感謝を伝えることができました。お父さんがここにいる、初めてお父さんの子どもになったと思いました。

大海原のここで命を落とした父、ここに来るまでは生きていた父。それが昭和19年9月21日、朝7時5分でした。父がお世話になった戦友の皆様にも、心からのお礼を申し上げ、ご冥福をお祈りすることができました。

個人的な慰霊も終わり、ホッとしているところです。このあと、今回来られなかった姉へ私の宝物、「徳島の海に流れてきて」と、遺髪の一部を流しました。これからは姉と徳島の海に行くから来てください。

7つの思いと願いが叶えられました。父と一緒に過ごした11日間は、泣きながらも幸せでした。

日本遺族会は今回の洋上慰霊では、語り部研修に多くの時間を割いてくれました。

私は戦争の記憶がないので、自分が語り部をする対象だとは思っていませんでしたが、研修を重ねるうちに私も戦没者の遺児として戦争の大きな爪痕を背負って生きてきたので、何かしなければと思いました。私を変えてくれた意義深い最後の洋上慰霊の旅となりました。

講話の中で、「今回の洋上慰霊で80年以上も片親で寂しい思いや苦勞をしてきた、その自分自身の歴史に大きな拍手をしよう」と言っていたが、参加者が力いっぱい自分に拍手を送りました。いくつになっても戦争の悲しみは消えません。慰霊の旅で出会った全国の遺児・遺族の皆さんと思いは同じで、語り合った涙は私のこれから生きる力となり、本日のように戦争を語る力をいただきました。

最後に5回目の慰霊です。ずっと前から行きたかった台湾の高雄市、高雄港へ行きました。

父が乗船した淡路丸が出港した高雄港は、父が生きていた最後の陸地でした。父が歩いたであろう境界の空気を吸い、風や光を感じながら地面を踏みしめて歩き、港の土を持っ

て帰りました。

ここで父は引き離された家族を案じながら、「男の子なら勝、女の子ならマサエ」と、最後の手紙を送ってくれた場所です。その手紙を綴る父の心境を思うと、戦争は絶対にしてはならないと、強く心に刻みつけました。

私は、淡路丸が出港した高雄港からバシー海峡に向かって父に話しかけました。

「お父さん、マサエです」と呼び掛け、最後の手紙と名付けてくれた感謝を伝えることができました。

最後の手紙の中に入っていた私の宝物の遺髪の一部を流しました。きっと徳島まで流れてきてくれると信じています。最後に父が生きていた台湾の高雄市、高雄港。やっと願いが叶えられました。

父が目にした、耳にした、空の色、海の色、雨の音、光や風、星空も見たい、感じたい。父が吸ったのと同じ空気を吸いたい。

夜空を見上げ、父もきっと見たであろう、あの洋上からの北斗七星。そんな思いの慰霊の旅は陸路18日間、洋上21日間に亘りました。こうして父の足跡を辿れたことで、本当に父の子どもになれたと心から思えるようになりました。そして父に促されるように、戦争遺児の人生を語らせていただいております。

私事です、来年で結婚60年になります。見合結婚をした夫の名前は勝なのです。父が最後の手紙で「男の子なら勝」と名付けた名前、漢字も同じです。父の思いが伝わったのでしょうか？何か不思議な縁を感じています。

父が生きていれば、父・母・祖母・姉と私と5人の暮らしがあったはずでした。父に会いたかった。父がいなくて寂しかった。甘えたかった。

母と姉から何度も聞いた優しい父、生きていればお腹の大きくなる母を労り、私の誕生を待ち望み、家族みんなが祝ってくれたはずでした。

父が生きていれば、姉が話してくれたように私を抱っこしたりおんぶしたり、自転車にも乗せて遊んでくれただろう、そんな様子を母はニコニコしながら見てくれていたのだろう。

当たり前の幸せな日常があったはずでした。

甘党だった父のため仏壇に好物を祀り、手を合やす母の姿ではなく、父と母の笑い合う、そんな姿が見たかった。

天国で会えるその時が来たら、「会いたかった、やっと会えましたね」と、父の懷に飛び込みたい。

父がどんな思いで最後を迎えたのか。父が後世に何を伝えたかったのか。自分の命と引き換えに、家族の幸せと日本の平和を祈りながら、二度と自分たちのような悲しみを繰り返してはならない。戦争のない未来を築いてほしいと願ったはず。

私のように直接の戦争体験がなくても、戦争の災禍に巻き込まれた悲しい記憶は深い心の傷となって喪失感や孤独感を抱え、一生消えることはありません。

戦争はどれほど私たちの日常を破壊し、家族の人生を変えてしまったか。かけがえのない父の顔も声も、手も足も、背中のぬくもりも、触れたくても触れる術もないのです。

戦後81年が経とうとしていますが、世界では戦禍が絶えることなく、これまでになく戦争が身近なものとして感じられるようになってきたと思っています。

私が体験したこのような戦争遺児を、誰にも味合わせたい。戦争遺児として語るができるのも、あと僅かになりました。

誰もが願っている戦争のない世界を次の時代に、次の世代に引き継ぐために、私たち一人一人が何をすべきか真剣に考えなければいけないと思います。

「平和の語り部授業」を実施

九月十四日（月）に、徳島県立城ノ内中等教育学校において、二年生の生徒など百五十名を対象に「平和の語り部授業」を実施しました。

今回の授業は、同校から日本遺族会に語り部派遣の依頼があり、実施したものです。
授業では、「先の大戦の概要」を



事務局から説明し、演女性部長による沖縄戦の講話と広島原爆に関する紙芝居を上演した後に、秋田町空襲の人権劇を上映しました。
今回の授業により、生徒の皆さんが「平和の尊さ」と「命の大切さ」について、考えるきっかけにしていただけは幸いです。



インターシップ大学生が記念館で学ぶ

令和八年八月十日（月）、十八日（火）、二十七日（木）の三日間、徳島新聞社で就業体験（インターンシップ）を行っている大学生十一名を受け入れました。

学生達はマスコミへの就職（新聞などの記者）を目指す県内外の大学三年生で、当日は事務局から「記念館の建設経緯」などの説明を受けた後に、記念館内部の視察を行いました。

その後、「戦没者記念館が明日開館する」という設定で、事務局職員を相手に模擬取材を実施しました。
参加した学生達は、記念館に初めて訪れたということで、模擬取材を通して、先の大戦の史実や、当時の徳島の状況、残された遺族の思い等の学習をしていたと思います。

今後も記念館においては、「戦争の悲惨さ」「平和の尊さ」を次世代に語り継ぐため、若い世代に対する平和学習の場の提供に努めて参ります。



百歳のお慶び

朝日奈 福夫さん（徳島市）



徳島市昭和町の朝日奈福夫様が、令和8年8月17日に、めでたく百歳の誕生日を迎えられました。

徳島県遺族会会長より、お預かりしたお祝い状と記念品をお贈りさせていただきました。

朝日奈さんから「本日は誠にありがとうございました。お陰で百歳を迎えられました。これからも穏やかに元気に過ごして参ります。」とお礼の言葉をいただきました。

朝日奈さんは6人兄弟の三男でした。お兄さん2人は戦死されて、朝日奈さんは終戦前に高知の部隊に出兵し、無事兵役を終えました。

戦後、自動車工場の整備士として勤務し、休日には両親がしている農作業を手伝っていました。

ご結婚後、奥様と2人で不動産経営と農業に従事し、二人のお子様に恵まれました。現在、息子さんが家業を継いでおります。

朝日奈さんは、デイサービスで楽しんでいて、家族にその様子を話してくれるそうです。今の元気の源は、「農作業で日差しを受けたことと会話をするのが良かったのでは」とご家族がおっしゃっています。

これからもお健やかに、穏やかな日々を過ごされますよう、心よりお祈り申し上げます。

徳島市昭和地区遺族会 会長 加古 健二

亀島 孝子さん（那賀町）



令和8年8月1日、那賀町平野の亀島孝子さんが、めでたく百歳の誕生日を迎えられました。

徳島県遺族会会長から、お預かりしたお祝い状と記念品をお届けするとともに、那賀町相生地区遺族会よりお祝い

をお贈りさせていただきました。

亀島さんは昭和19年にお義兄さまをソロモン群島で亡くされており、現在は、町内の福祉施設に入所され、穏やかな日々を過ごされています。

誕生日当日には、施設の一室でセレモニーが行われ、ご家族や職員とともに、記念すべき百歳のお誕生日を過ごされました。セレモニーには、お孫さんも駆けつけられており、皆さまの温かな笑顔に包まれた、心に残るひとときとなりました。

これからも、ご家族の皆さまに囲まれ、健やかで心穏やかな日々を過ごされますことを、心よりお祈り申し上げます。

那賀町相生地区遺族会 会長 田中 恒弘

地方だより

令和8年度

市町村戦没者追悼式の開催

令和8年度の戦没者追悼式が各地域において執り行われ、当日は県遺族会役員が参列しました。



牟岐町戦没者追悼式：6月10日



海陽町戦没者追悼式：6月21日



上勝町戦没者追悼式：7月31日

「春の靖国神社参拝団・千羽づる奉納旅行」の実施について

今年度も「春の靖国神社参拝団」を募集します。
今回も2泊3日の行程で、隅田川クルーズ・千羽づる奉納・熱海温泉での宿泊などを予定しております。
多数のご参加をお待ちしております。

6. 行程 (予定)

- 1 実施予定日
令和9年3月29日(月)～3月31日(水)
- 2 主な行先
靖国神社正式参拝、隅田川クルーズ、
埼玉県護国神社(千羽づる奉納)、
熱海温泉、鶴岡八幡宮、横浜中華街
など
- 3 旅行代金
14万円程度
- 4 募集人員
40名(最少催行人員25名)
- 5 募集締切
令和9年1月下旬

日時	月日(曜)	行程
1	3/29 (月)	徳島空港 8:55 → JAL454 羽田空港 10:10 10:45 靖国神社(昇殿参拝・昼食) 11:30 13:50 浅草・浅草寺散策 14:30 15:45 浅草(桜クルーズ) 16:10 隅田川を下るクルーズ船に乗船 エメラルダス 17:00 お台場 17:10 ホテル着(懇親会・泊) 17:30 ◎宿泊施設:「KKRホテル東京」 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 TEL: 03-3287-2921
2	3/30 (火)	千羽づる奉納 昼食(金目鯛の炙り飯膳) ホテル 8:30 → 埼玉県護国神社 9:30 10:30 鈴鹿かまぼこの里 12:30 14:00 大涌谷 14:45 15:30 ホテル着(チェックイン) 16:30 熱海温泉街散策 16:40 18:10 ホテル(夕食) 18:30 ◎宿泊施設:「熱海後楽園ホテル」 〒431-8626 静岡県熱海市和田浜南町10-1 TEL: 0557-81-0041
3	3/31 (水)	(車窓見学) 桜のトンネル 昼食(中華ビュッフェ) ホテル 8:30 → 貫一お宮之像 10:00 鶴岡八幡宮 11:30 12:15 横浜中華街「大珍楼」 13:30 → 羽田空港 14:00 → JAL461 徳島空港 15:40 16:55

注1) この行程は事情により内容を変更する場合があります。
注2) 最終の旅行代金・行程等は11月下旬までに確定し、募集チラシを作成しますので、県遺族会事務局までお問い合わせください。

会報の次回発行は、
令和9年1月号です

本会の会報は、年4回(1月・4月・7月・10月)に発行します。

令和八年七月～九月実施行事	(七月)	11日 正副会長会(護国神社) 11日 語り部事業(戦没者記念館) 21日 英霊にこたえる会総会(護国神社)	(八月)	1～16日 特別企画展(戦没者記念館) 1～2日 みたま祭り(護国神社) 14～15日 全国戦没者追悼式(日本武道館) 15日 平和祈念祭(護国神社)	(九月)	4日 正副会長会(護国神社) 12日 語り部事業(徳島グラウンヴィリオホテル) 12日 令和8年度徳島県戦没者遺族大会(徳島グラウンヴィリオホテル) 28～29日 英霊にこたえる会中国四国ブロック会議(広島市)	令和八年十月～令和九年三月行事予定	(十月)	27～28日 日遺中国四国ブロック会議(山口市) 31日～11月1日 日遺戦跡巡拝・語り部研修会(浜松市・掛川市)	(十一月)	2日 例大祭(護国神社) 14日 正副会長会(護国神社) 14日 語り部事業(戦没者記念館) 17～18日 沖繩「徳島の塔」慰霊巡拝(糸満市ほか)	(十二月)	8日 全国戦没者遺族大会(自民党本部ほか) 19日 青年部平和の語り部研修会(徳島市内ホテル)	(一月)	9日 正副会長会(徳島市内ホテル) 9日 語り部事業(戦没者記念館) 下旬 日遺青年部長会議(九段会館テラス) 下旬 日遺事務局長会議(九段会館テラス) 下旬 日遺女性部長会議(九段会館テラス)	(三月)	13日 正副会長会、記念館企画運営委員会(護国神社) 13日 語り部事業(戦没者記念館) 22日 理事会・記念館奉賛会総会(護国神社) 29日～31日 春の靖国神社参拝団・千羽づる奉納旅行(東京都・埼玉県・静岡県)
---------------	------	--	------	--	------	--	-------------------	------	--	-------	--	-------	--	------	---	------	--